

G7広島宣言「非人間的な苦難」は誤訳。なぜこの問題が重要か

昨日(4月11日)のG7外相広島宣言は、原爆投下が「極めて甚大な壊滅と非人間的な苦難」をもたらしたと記した、と発表された。だがこれは深刻な誤訳である。

英語原文は「immense devastation and human suffering」であり、これを訳せば「甚大な破壊と人間の苦しみ」となる。「human suffering」の「human」は、「人間の」とか「人的な」という意味だ。例えば、原爆投下によって「環境上の被害(environmental damage)」とか「経済的な影響(economic impact)」とかがあると同様に、そこに「人的な」「人間の」苦しみがあった、ということだ。「human cost」とか「human needs」という言葉もあるが、この「human(人間の)」は、次元を表す形容詞である。これに対して「非人間的な」という日本語は、きわめて強い道徳的価値観(=悪)を伴った言葉である。「human suffering」には、そこまでの価値観を伴った意味合いはない。客観的に「人間の苦しみ」があったと叙述しているに過ぎない。

岸田外相は昨日の会見で、広島宣言が「極めて甚大な壊滅と非人間的な苦難」を盛り込んだことをことさらに強調した。そして昨晚から今朝にかけてテレビや新聞はこの言葉をそのまま垂れ流した。「非人間的な苦難」が今朝の一面トップ見出しになっている新聞が複数ある。日本政府の訳はあくまで「仮訳」である。マスコミ各社において、しっかりと検証し、どのような訳語を用いるのがもっとも妥当であるかについて議論をしていただきたい。政府は「仮訳」を公式訳に変える際に、訳語の変更をすべきである。

問題点①米国の原爆認識

私がこの問題が重要であると考えている理由は、二つの次元に大別される。第一に、原爆投下と日米の歴史認識に関わる問題である。まず誤解のないようにしておきたいが、私は、米国の国務長官を含むG7外相が、原爆投下が「甚大な破壊と人間の苦しみ」をもたらしたとの認識を表明したことは、重要な前進であったと考えている。米国においては今なお、原爆投下は数多くの人々の命を救った正当な行為であったという歴史認識が支配的である。こうした中で、米国務長官が広島を訪れ、そこに「人間の苦しみ」があったと認めたことは、米国の原爆認識を変えることにつながる重要な一歩だ。

しかもケリー長官が昨日、広島訪問の重要性をオバマ大統領に伝えると発言したことで、オバマ大統領の広島訪問は現実的な可能性を持つようになってきた。大統領が来るとなればなおのこと、米政府の原爆投下に関わる認識が焦点化される。謝罪するのかもしれないのか、謝罪はしなくても「妥当な行為ではなかった」と認めるのかどうか、といったことが政治的・外交的課題になろう。そうした中で、米政府がいったいどこまでを既に認めたのかという問題は、両国民の間で正確な共通認識を持つておく必要がある。それは、日本政府が南京大虐殺や慰安婦問題で公式にどこまでを認めているのかがたえず中国や韓国との間で政治的・外交的争点になるのと同じことである。

政府による「誇張訳」とそれに対するマスコミの追随によって、米政府があたかも原爆投下が「非人間的」であったと既に認めたのだと日本国民が誤解してしまったならば、それは将来に向けて大きなボタンの掛け違いになる。現状は「人間の苦しみ」があったということを認めたということであって、それ以上でもそれ以下でもない。日本側だけで、勝手にそれ以上に解釈して思いこむことは、日本にとっても今後の日米関係にとっても、害である。

問題点②核兵器の非人道性

第二に、核兵器の非人道性の議論との関係である。2010年以来、核兵器がもたらす非人道的な影響に対する国際的な関心が高まり、核兵器を非人道兵器として国際人道法で禁止すべきだという声が高まってきた。これが、核兵器禁止条約をつくろうという運動を後押ししている。

核保有国はこの「人道性」の議論を嫌っており、2013～2014年に計3回開催された「核兵器の人道上の影響に関する国際会議」への出席をボイコットしたり、核兵器の非人道性に言及する国連決議に反対投票や棄権をし続けてきた。より正確にいうと、米国と英国は第3回の「核兵器の人道上の影響に関する国際会議」(ウィーン)には参加したが、そこで核兵器禁止条約への機運の高まりを体感するや、その後は一転して「人道」議論に対する批判を強めている。昨年10月の国連総会で米国は、これまで毎年賛成してきた日本の核廃絶決議案に棄権した。日本決議案の中に「人道」の文言を嫌ったとみられている。

「人道」という言葉を使うと「国際人道法」が連想され、核兵器の法的禁止のニュアンスが出てくる。「人道」は、そのような国際法概念との親和性が強い言葉なのである。

G7外相広島宣言をめぐる駆け引きは、おそらく次のようなものだったのだろう。米英仏の核保有3カ国は「人道性」とか「非人道」といった文言を入れることを拒絶した。しかし日本としては開催地・広島の世界論も考えて、「非人道性」は無理でも、なるべくそれに近い言葉を入れたい。このことから、「human suffering」を「非人間的」と強引に訳して、非人道ではないがそれに近い言葉を勝ち取ったというふうに説明してみせた。――複数の報道や、政府関係者の発言の中から、日本政府内にそのような「工夫」があったことが推察される。だがそれは行き過ぎた工作であり、深刻な誤訳をばらまく結果になってしまった。

人道性？非人道性？

関連して、国際社会で今議論されている「核兵器の非人道性」とはどのようなことなのかを正確に理解するために、さらに二つの問題点を指摘しておきたい。

まず、言葉の問題である。2010年以来使われているのは、核兵器の使用がもたらす「humanitarian consequences(人道上の結果／結末)」、「humanitarian impact(人道上の影響)」、核軍縮の「humanitarian aspect(人道上の側面)」、これらの問題を掲げる国家グループの運動を意味する「humanitarian initiative(人道イニシアティブ)」といった言葉である。ここでいう「humanitarian」をどう訳すのか。「人道上の」とも訳せるし「人道的」とも訳せる。どちらに訳しても間違いではない。

だが、日本語として、核兵器の「人道的影響」と訳してしまうと、おかしな響きを感じる人も多いだろう。核兵器に「人道的に良い影響」なんてあるわけない、と思うからである。

すなわち「humanitarian」というのは、「人道上の観点からの」「人道性に関する」という、分野や次元を表す形容詞であって、それ自体として必ずしも、人道的に良いことであるとか非人道的な悪いことであるという価値判断を含まない。

核兵器の議論においては、これまで「軍事上」とか「国家安全保障上」の議論が支配的であったのに対して、「人道上」の議論をし始めたことに意味があった。新しい議論の地平を提示したことじたいが、画期的であったのだ。もちろん、そのような議論を提起する背景としては、核兵器を人道上「悪いもの」とみなしたいという動機があることは間違いない。

「核兵器の人道上の結末(humanitarian consequences)に関する共同ステートメント」が国連総会に提起され、日本政府は2013年10月にこれに参加することを決定した。このときに日本政府は、これを国内向けに「非人道的結末」と訳した。これはおそらく、「人道的結末」としてしまうと、まるで核兵器に人道上好い結末があるかのように聞こえてしまうので、そのような誤解を避けるために「非」を付けたのだと思われる。そもそも原爆で被害を受けた被爆者の方々からみれば、「核兵器の人道性」なる言葉自体、感情的に受け入れがたいだろう。政府が訳語に「非」を付けたのには、そのような国内的配慮があったと思われる。

こうして、国際社会では「人道性」や「人道上の影響」が客観的な議題として論じられているなか、日本では「非人道性」や「非人道的影響」という訳語にして、より感情を移入したテーマとして理解

するという「ずれ」が始まった。むろん、国際社会での議論においても、核兵器を「人道上良いもの」とするような主張があるはずもないので、「核兵器を悪いものとみなす」を指向性で両者は一致しており、大きな問題はないのだが。

今回外務省が「human＝人間の」にまで「非」をつけて「非人間的な」という極端な訳語を作り上げてしまった背景には「国内的には”非”を付けておいた方がよい」というこれまでの習性があったのかもしれない。だがいずれにせよ、深刻な誤訳を導いてしまったことは変わらない。

同じような問題は、核兵器の使用・威嚇に関する1996年の国際司法裁判所の判断を、「合法性(legality)」に関する意見とするか「違法性(illegality)」に関する意見とするか、という違いにもみられる。ただしこれはマニアックな話なので、割愛する。

広島・長崎か、今日の核兵器か

もう一つのポイントは、国際社会で議論されているのは「あらゆる核兵器」についてであって、広島・長崎の原爆に限った話ではないということだ。むしろ国際社会の関心の焦点は、過去よりも、今日1.5万発以上存在する世界の核兵器に向けられている。核兵器の(非)人道性に関する議論は、2010年以来、「今ある核兵器が、どの国のものであれ、誰の手によってであれ、一発でも使われれば壊滅的な人道上の影響をもたらす」という点にある。「any use of nuclear weapons...」といわれるゆえんだ。

日本の私たちは、世界で核の非人道性に関する議論が盛り上がっていることを、広島・長崎の原爆投下の非人道性と重ねて認識しながら、理解し、歓迎し、応援してきた。それは悪いことではない。だが、広島・長崎の苦難に世界が理解を深めてくれることに励まされつつも、私たちはさらに一歩進んで、今日存在する核兵器がもたらしている問題にもっと目を向けるべきではないか。

その意味で、今回のG7外相宣言が、1945年8月の原爆投下が「人間の苦しみ」をもたらしたと認めたものの、それ以外の今日の核兵器がもつ非人道性には一切触れなかったことは強く批判されなければならない。米英仏3カ国が保有する核兵器、あるいは日本を含む4カ国が「核の傘」と称して依拠している核兵器のうち、一発でも使われればそれはまさに非人道的結末をもたらす。そのことを7カ国は理解しているのか。広島訪問によって、その問題の甚大さを学び直し、緊急性の意識を高めたはずではないのか。残念ながら、G7広島宣言をみる限り、そのような危機意識は読み取れない。71年前の原爆被害については一定の理解を示しつつ、自分たちが今日依拠している核兵器を「人道上」の観点から議論することを拒否した。それこそが、今回のG7外相広島宣言の最大の欠落点である。

2016. 4. 12

川崎哲

参考

G7外相広島会合に関する外務省ホームページ

http://www.mofa.go.jp/mofaj/ms/is_s/page24_000565.html

G7外相広島宣言(日本語仮訳)

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000147441.pdf>

G7外相広島宣言(英語原文)

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000147442.pdf>